対談

百期百会 67

ひゃくごひゃくえ

遺族のプロとして遺品と向き合う。

キーパーズ有限会社　代表取締役　吉田　太一さん　●聞き手　橋本　登代子

遺品整理専門の会社があることをご存知ですか。住まいが遠く離れている、忙しくて自分の手ではできない、そうかといって廃棄物として一括処分するのは抵抗がある。そこで力になってくれるのが遺品整理というサービス。この仕事を日本で初めて手がけたのが愛知県に本社のあるキーパーズ有限会社です。今回の対談はキーパーズの代表取締役であり、「孤立死」「遺品整理屋は見た！」の著者でもある吉田太一さん。遺品整理の現場から見える社会の現実など、ご自身の半生をまじえてお話しを伺いました。

橋本　まず最初に遺品整理というお仕事について教えていただきたいのですが？

吉田　簡単に言えば、文字通り遺族に代わって亡くなられた方の遺品を整理・処分するという仕事です。かつて家族がひとつ屋根の下で暮らしていた時代は、そのまま遺族が使ったり、ご近所の方々に使っていただいたりと、それほど大変な作業ではなかったのですが、近年は兄弟が少ない、遠隔地に住んでいる、時間や経済的に余裕がない、ご近所付き合いもほとんどない、といった状況が増え、遺族にとって遺品整理は大きな負担になってきました。私たちのような遺品整理専門の会社ができる前は、やむを得ず廃棄物処理業者や便利屋などに依頼するしかなかったのですが、遺族の気持ちとしてはゴミ扱いしてほしくないというのが本音でした。

橋本　確かにゴミとして処分してしまうのは遺族としては心が痛むでしょうね。私は遺品整理の経験がないので分かりませんが、仕事としての遺品整理はどこが難しいのですか？

吉田　ひと口に遺品整理といっても部屋にある持ち物を整理するだけでは済みません。家屋の解体や改修も発生することがあります。遺品整理の基本は、依頼主が残しておきたいという品以外は所有権を放棄していただきます。新しい家電などは買取金額を見積って、作業料金と相殺します。もちろん遺族の知らない貴重品などが見つかった場合はそのままお渡しますし、手元に残した方がいいのではと現場で判断したものは確認を取ります。見積りを承諾いただければ正式契約をし、日取りを決めて作業に入ります。ご希望があればお祓いをすることもあります。再生可能な品物の扱いや分別の方法は地域によって違うので、地域の提携会社と組んで作業に当たることが多いですね。遺族の判断を必要とするものについては、片付け終わった部屋に並べておき、確認してもらいます。遺品整理の基本は、依頼主が残しておきたいという品以外は所有権を放棄していただきます。新しい家電などは買取金額を見積って、作業料金と相殺します。もちろん遺族の知らない貴重品などが見つかった場合はそのままお渡しますし、手元に残した方がいいのではと現場で判断したものは確認を取ります。見積りを承諾いただければ正式契約をし、日取りを決めて作業に入ります。ご希望があればお祓いをすることもあります。再生可能な品物の扱いや分別の方法は地域によって違うので、地域の提携会社と組んで作業に当たることが多いですね。遺族の判断を必要とするものについては、片付け終わった部屋に並べておき、確認してもらいます。

橋本　家の解体も引き受けるんですか？

吉田　更地にして売却を希望する遺族も多いです。以前、家屋を解体、更地にした上で駐車場にし、お客様まで付けて引き渡したこともありますよ。

橋本　具体的にはどんな手順で仕事をするのですか？

吉田　依頼を受けると、まず亡くなった方のお宅へ出向いて遺品を見せていただき、見積りをする時、遺品を運ぶ仕事を通じて、遺族と出会いました。お宅に行ってみると運ぶ品物以外にも荷物が残っている。この荷物どうするんですかと訊ねると、これから処分してくれる業者を探すというんです。吉田物流は当時器用な引っ越し屋としてさまざまな付加サービスをやっていましたから、私たちが処分しましょうかというと、「本当に頼んでいいのか、今、残った荷物の処分を引き受けてくれる人はみんな神様に見える」とボソリ。お金をいただいた上に神様になれる、これを仕事にしてもっともっと喜ばせてあげようと考えたのがきっかけです。そして遺品整理にかかわる仕事は断らない会社、遺族のプロをめざそうと9年前に遺品整理専門会社キーパーズ有限会社を設立しました。

橋本　板前の仕事から運送業への転身はなぜ？

吉田　結婚を機に大阪へ帰ったのですが、もちろん仕事のアテもない。宅配の仕事は給料が良いという話を聞き込んで、大手宅配会社に勤めたんですが、確かに仕事は厳しいものの収入は良い。この時期に家を建てたんですが、長期のローン返済はゴメンだと思い、10年にしてもったら月の返済額は46万円に。それを払っていたんですからずいぶん稼いでいたんですね。当時は。

橋本　その後、独立されたということですね？

吉田　もともと最終的には自分で商売をすると決めていたので、ある時コンビニ店経営の話があって宅配会社を退職、ところがコンビニの話が途中で頓挫してしまい、たちまち自己破産寸前になってしまったんです。それでやむなく軽自動車を一台買って運送の仕事を始めました。そして5年後、吉田物流として会社設立へとつながるんです。

橋本　まだ道半ばでしょうが、波乱万丈ですね。ところで、吉田さんの書かれた本には『孤立死』とありますが、私は『孤独死』という言葉を思い浮かべてしまいます。どこが違うのでしょう？

吉田　『死』は別にして、孤立と孤独を考えると、『孤独』は自分の意志で選ぶ場合もあって、今ひとつ実情を表現する上で伝わりにくい。『孤立』は本人の意思に関係なく、社会とのつながりが断ち切られて存在を忘れられていくという現実を伝える言葉です。遺品整理という仕事を通じて私が認識している現実に合っていると思います。

橋本　『孤立』は増えているのでしょうか？

吉田　確実に増加傾向です。現状では遠くに住んでいるとか、忙しくて余裕がなく、自分で遺品整理はできないが、依頼はできるという遺族が多い。でも今後は恐らく、無縁社会という言葉もあるように、真の孤立、かすかに繋がった遠い親戚程度しかおらず、遺品を整理してくれる人がいない、さらには整理を依頼してくれる人さえいないという状況が増えてくるのではないかと思います。

橋本　かつての高度成長とそれに伴う核家族化が『孤立』の原点と思いますが、どうすれば『孤立』を避けられるのでしょうか？

吉田　孤立化はさまざまな要因が絡み合っていますから、社会環境からの問題解決は簡単ではありません。まず自ら助くことが『孤立』を防ぐ第一歩でしょう。歳を重ねればどうしても人とのつながりは少なくなっていきます。社会との接点、例えばご近所とか趣味の集まりといった共同体との接点を持ち、継続することが必要でしょう。動けば接点が生まれます。接点ができれば楽しいこともあります。

橋本　誰だって孤立した自分を想像するのは辛いですから、人と人の縁を大切にして楽しく生きようということですね。今日は貴重なお話しをありがとうございました。

●吉田さんの著書
「孤立死」(右)と
「遺品整理屋は見た！」(左)

特集

身仕舞いについて考える

いざというときのために今できることがある

「しまう」という言葉があります。
「仕舞う」「終う」「了う」などと書かれます。
「終りにする」「片付ける」というような意味です。
「店仕舞い」や「早仕舞い」のほか
「仕舞い湯」という言葉にも使われています。
「身仕舞い」にも、この「仕舞う」という文字が使われています。
しかし、この意味は、どの辞書を見ても
「身なりを整える」
「特に女性が化粧、身支度すること」
などと載っています。

「命」を「仕舞う」のだから「命仕舞い」
「命」は「身」だから、
「身仕舞い」は「最期の身だしなみを整える」
という意味で捉えたいと思います。